

女性研究者を活かす

日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」の取り組み④

「理系で学んでよかった80%」卒業生のアンケート調査から

日本女子大学理学部教授・プロジェクトリーダー 小舘 香椎子

日本女子大学の女性研究者マルチキャリアパス支援モデルのプロジェクトでは、女性研究者の研究活動の継続あるいは中断からの復帰への支援や、女性研究者の活動範囲を研究分野のみではなく、もっと広い範囲のキャリアパスへの拡張や開拓を支援することを目的としている。また、次世代の理系女性を増やすねらいで、科学教室を開催し小・中・高校生を対象とした教育活動は、順調に参加者数が増えている。

本理学部は平成四年四月、数物科学科、物質生物科学科の二学科体制で発足した。それ以前は、家政学部の家政理学科一部（物理化学専攻）と家政理学科二部（生物農芸専攻）として理系分野の教育研究を行ってきた。これらの理系の卒業生は様々な分野で活動を行い、実績を積み上げて高い評価を得ており、身近なロールモデルとなっている。しかし、女性研究者・技術者がキャリアを積み上げワーク・ライフ・バランスを実現していくための環境が整備されているとはいえない。本プロジェクトの目的を実現するための基礎データの収集をするために家政学部・理

学部の卒業生を対象としてアンケートによる調査を行った。

調査・企画部門

次世代の理系人材の育成のため、調査・企画部門は、調査部門と企画部門の二部門で活動を行っている。それぞれの部門のこれまでの活動を以下に述べる。

【調査部門】

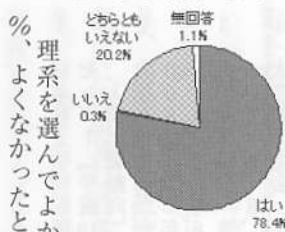
(1) アンケート調査の実施

平成十九年度に回収、分析を行った。本学家政理学部家政理学科および理学部の卒業生のうち、M字カーブのへこみに該当すると思われる年齢二十八歳から四十七歳にわたる約一八〇〇名を選び、アンケート用紙を配布した。回答数は三六七名で回収率二〇%を確保した。

これらの卒業生の約八割が理系を卒業してよかったとの意識を持っており、理系へ進学した理由は好きあるいは成績、先生あるいは親、親族の影響が大きいこと、修士・博士課程への進学希望も高く、就職後も長期にわたって働き続けている現状が分かった。これらの

結果は平成十九年十月二十一日の理学部ホームカミングデーのシンポジウムでも報告された。

〈あなたは理系を選択してよかったと思いますか?〉

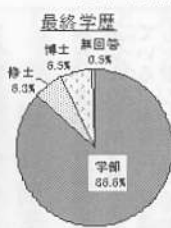


理系を選んでよかったとするものが78.5%、よくなかったとするものが0.3%、どちらともいえないとするものが20.2%、無回答が1.1%。

〈理由〉

- ・日常の小さな原理、仕組みにも興味を持ち、必要に応じて調べるなど、生活が豊かになる。
- ・日常生活の中で興味の幅が広がった。
- ・論理的な思考力が何かと人生において役立った。
- ・企業において男性と同等に仕事できた。
- ・その気になれば、社会のことを含め広い分野で勝負が可能（努力しだいでは理系も文系もカバーできる。）

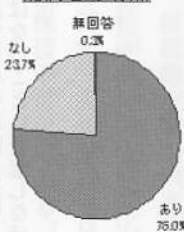
〈基本情報〉



年齢分布

28~29歳	3.8%
30~34歳	19.9%
35~39歳	25.9%
40~44歳	37.9%
45~47歳	12.5%

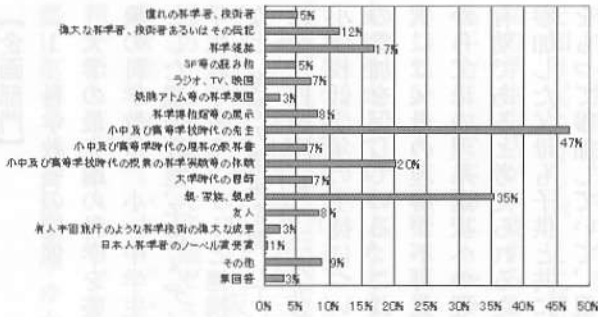
配偶者の有無



学位取得の有無

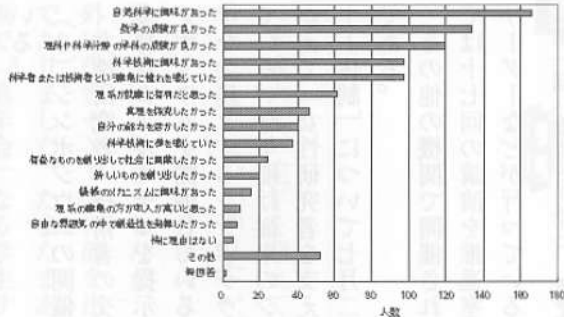


〈理系選択の理由・動機〉



理系進学動機は、小中及び高等学校時代の先生が47.1%、親・家族・親戚が35.4%、小中及び高等学校時代の授業の科学実験等の体験が20.2%とあり、中・高等学校での体験とくに先生の役割が非常に大きいことが明瞭に読み取れた。

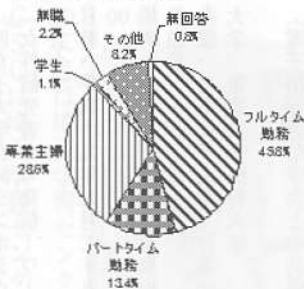
〈進路に影響を与えた人物や事柄は何ですか？〉



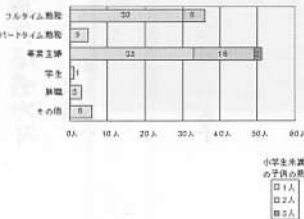
自然科学に興味をもったことが理由で理系を選択するよりも、理学科目の成績で選択した人が有効回答の70.2%と多く、高校の進学指導の影響が大きいことがうかがえた。自然科学の真理探究よりも実用に近い技術系の関心が高く、就職に有利であるなどの現実的傾向がはっきりと現れている。

らともいえないが20・2%だった。この結果には、年齢や分野による偏りはみられなかった。圧倒的に自分の選択に満足していることがうかがえた。

〈現在の勤務形態〉



〈子供（小学生未満）の数と勤務形態〉



この結果は、定時勤務が主流であるが、フレックス制や裁量労働制の導入が、家庭と仕事の両立に寄与していると考えられる。育児休暇取得者は40%以上であり、企業などにおいては、職場における育児休暇制度は整

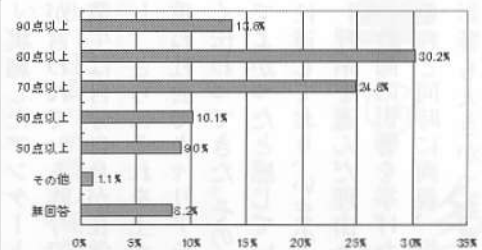
どんなときに満足感・充実感を得られるか？

- 〈職場〉
- 新たな発見があったとき
 - 新しい知識を得たとき
 - 後輩を育てることの充実感
 - 仕事への高い評価を得たとき
 - 自分の発明が上市するとき
 - 人の役に立っていると感じたとき
 - 顧客によるこぼれたとき

〈教育の現場〉

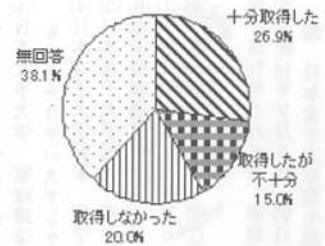
- 生徒がわかる授業ができたとき
- 教え子の成長をみるとき
- 不登校の生徒と意思の疎通ができたとき

〈理系選択の理由・動機今の生活（家庭・仕事含む）の充実・満足度は何点ですか？〉



今の生活（家庭・仕事を含む）の充実・満足度は80点以上を中心として50点以上のものが90%以上を占めた。これは理系に進学してよかったとする割合が約80%を占めたことと符合しています。概ね理系を選択した女性は人生に満足しているようである。

〈育児休暇の取得〉



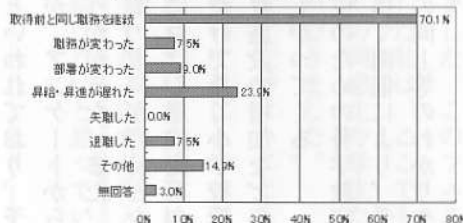
〈取得しなかった理由〉

- 職場に制度がない
- 制度があっても仕事との両立が難しいと感じて退職した
- 任期付のポストでは育児休暇制度を利用できない

〈取得不十分の理由〉

- 職場復帰時期と保育園入園時期（主に4月）を合わせる必要がある場合が多い
- 職場に育児休暇を取りにくい雰囲気がある
- 役職についた立場では長期休暇をとりにくい
- 育児休暇をとると昇給しにくくキャリアの妨げになる

〈育児休暇の取得後の影響〉



育児休暇取得前と同じ職務を継続している割合が70%を超えている。育児休暇の取得が職務の継続に影響を及ぼさない社会になってきている一方で、昇給

い、制度の利用も定着してきていると考えられる。取得期間を尋ねた設問では長期化の傾向が出ている。一方、自由記述において義務教育年齢の子供の学童保育の充実を望む声があった。

昇進が遅れるなどの処遇の差も払拭はされてはいない現状がうかがえる。能力や業績に応じた評価や成果主義といった女性に対する積極的評価がまだ低いという背景があるであろう。

【企画部門】

(1) 科学教室の開催

大学の最先端の科学を盛込んだ中・高校生対象の科学教室、小・中学生とその父兄を対象とした親子教室、子供メディアフォーラム・本学生涯学習センターと連携した子供科学教室など、多数の講座を開いている。平成十九年度は全二四講座、延べ三六九名の参加があった。小学校低学年の生徒については特に父母同伴の参加を促している。これは、将来の理系選択には父母の理解が不可欠であり、早いうちから父母の理系選択への理解を求めめるために有効であると考えられるためである。実際に参加した父母も子供と共に科学技術への関心をもって参加していて、親子の会話も弾んでいる。

(2) シンポジウムの開催

女性研究者・技術者の交流と学生への多種多様なロールモデルを提示する機会としてシンポジウムを開催している。これまでに、本学会を会場とするシンポジウムは四回開催されている。今年度は従来のシンポジウムと形をかえて「女性研究者を支える側から見たサポート体制」について七月二十六日に開催予定である。

その他の機関で開催されたシンポジウム等では十七回の講演を推進室長、プロジェクトリーダーなどが行っている。

〈第一回「女性と科学」〉

日時：平成十八年七月十五日(土) 14:00～17:00
場所：日本女子大学 桜楓館二号館四階
参加者：来賓・一般二七名、学内関係者三一名、学生二二七名 合計三九五名

〈第二回「女性と科学」〉

日時：平成十八年十一月二十五日(土) 13:00～16:00
場所：日本女子大学 成瀬記念講堂
参加者：来賓・一般二七名、学内関係者四七名、学生九三名 合計一六七名

〈四女子大学合同シンポジウム〉

「女性研究者から発信！ワーク・ライフ・バランス社会へ」
日時：平成十九年九月二十九日(土) 13:00～17:00

場所：日本女子大学 新泉山館一階 大会議室

参加者：一五〇名

主催：日本女子大学、お茶の水女子大学、奈良女子大学、東京女子医科大学

〈電子情報通信学会との共催シンポジウム〉

「将来のICT社会を支える女子学生たちへ」―企業で活躍する先輩からのメッセージ―
日時：平成十九年十二月八日(土) 13:30～16:30

場所：日本女子大学 桜楓館四階 講堂
参加者：一五〇名

主催：電子情報通信学会

共催：日本女子大学、明治大学、早稲田大学、津田塾大学、東京女子大学

【まとめ】

実施したアンケート結果からは、理数離れが言われている昨今ではあるが、本学理系卒業生は自分自身が在学中に学んだ専門を生かし、さらにそれを土台として卒業後も研鑽を重ね社会でキャリアを築いている様子が力強く伝わってきた。その結果として、理系を学んでよかったと感じている卒業生が約八割近くに達しており、いまの生活の満足度も高い。

理系を選んだ理由としては、小・中・高校の教師の影響を挙げた人が顕著に多かった。それと同時に両親、祖父母など身近な親族の影響も大きかったことが回答から読み取れ

た。これは、子供の成長と将来の選択に当たって、学校と家庭、とりわけ先生と親の果たす役割が極めて大切であることを物語っていると言えるであろう。

結婚・出産・育児は女性にとって大変大きなライフイベントであるといわれており、予想されたことではあったが、アンケートからもそのことがはつきりとうかがえた。また、両立のためには、育児休暇の取得が容易となるような職場環境や社会における意識変革の必要性、および乳幼児期だけでなく小学校低学年を対象とする学童保育施設の増加などの具体的な支援策が浮かび上がってくる。

次世代の理系人材の育成のための科学教室等を理学部教員の参加を得て開催により、受験生の増加および定着率の向上等のわかりやすい成果が得られている。

〔参考文献〕

- (1) 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」News Letter 第3号
- (2) 日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」平成19年度成果報告書
- (3) 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」News Letter 第3号
- (4) 日本女子大学 家政理学科・理学部卒業生にみる「マルチキャリアパスアンケート」結果報告書
- (5) 日本女子大学 理学部 第15号(2007)
- (6) 日本女子大学 理学部 第16号(2008)
- (7) 電子情報通信学会誌 Vol. 90 No. 6(2007)
- (8) 学術月報 Vol. 60 No. 5(2007)
- (9) 平成18年9月5日 朝日新聞「育児・研究両立へ支援策」
- (10) 平成19年8月6日 産経新聞「増やせ！理系女子」
- (11) 平成19年9月3日 朝日新聞「理系でよかった」が8割 日本女子大卒業生調査